

被虐待児童の身体感覚から見る自己の再構成

片山 知子

この論文の目的は、被虐待児童の身体感覚を考察することによって、被虐待児童の自己の再構成がどのようになされるのかを理解することにある。そのために、まず児童虐待の社会的な位置づけにふれる。次いで、症状および障害と治療に関する先行研究から、被虐待児童の面接およびその問題点を理解する。そして、被虐待児童の身体感覚の考察へと進む。

1. 子どもと児童虐待の社会的位置づけ

児童虐待はギリシャ神話に登場するほどその歴史は古い（西澤、1994）。しかし、児童を一人の人格と認識し、被虐待児童が社会問題として取り上げられるようになってからの歴史は短い。

ローマ法では、子どもは親の所有物だと規定されていた。1600年代には子どもの虐待や殺害に関する裁判が行われるようになった。しかし、養育者が罪に問われることはなかった（西澤、1994）。中世ヨーロッパでは、子どもは大人の不完全なものとして考えられ、大人は子どもに適した養育や教育をしてこなかった（Aries, Ph., 1973）。1762年にフランスでルソー（Rousseau, J.J.）が子どもを一人の人間として、その年齢に適した養育や教育をするべきだという考えを示した。それ以来、子どもへ関心が向けられ教育が行われた。ニューヨークでは、1874年まで動物愛護協会が被虐待児童の保護活動を請け負っていたが、1875年に家庭内の被虐待児を保護する保護協会が活動し始めた。1924年に国際連盟において子どもの保護を主とした「児童の権利に関するジュネーブ宣言」が採択された。次いで1959年に「児童権利宣言」が採択された。医療や社会福祉の関係者が虐待に関心を持ったのは、1960年代の初期にアメリカの小児科医ケンペ（Kempe, H.）が、子供の負傷の多くが偶発的でなく養育者によること発見したことからである（Patonum, P.W., 1997）。そして、1989年には、「児童の権利に関する条約」が制定された。

日本でも、死亡率の高い子どもを一人の人間であると考えない歴史は長く続いた（本田、2000）。1947年に「児童保護法案」が制定され、全国の都道府県に児童の相談に対処するために児童相談所が設置された。1951年に「児童憲章」が制定された。1994年には、「児童の権利条約」が出され、1997年に「児童福祉法」が改正された。そして、2000年に虐待の早期発見と通告義務を含んだ「児童虐待防止法」が施行されて以降、社会的に児童虐待は特に注目されはじめた。厚生労働省の調べでは、2003年度には児童相談所への虐待相談件数が2万7600件あり、統計を取り始めた1990年に比べるとほぼ25倍となった（川崎、2006）。またそれに伴い、臨床心理士が児童相談所や児童養護施設に配属され、被虐待児童にかかわる機会も増えた。

2. 被虐待児童における症状と情緒および行動の障害

被虐待児童に必ず症状が生じるわけではないが、虐待を受けた多くの子どもたちは、様々な症

状や、情緒や行動の障害に苦しんでいる。その苦しみは、生理的、身体的なものから、心理的、社会的なものまで多岐に渡る。

まず、成人について取り上げる。虐待によって成人にPTSDが発症した場合、その中核症状は、解離であり、切り離された記憶は行動やフラッシュバックによって再演される（斉藤、1998）。しかし、人生早期から長期にわたる複合型のPTSDは、DSMやICDの診断基準にある精神障害や意識の変化、解離による症状だけではなく、感情や衝動のコントロール、認知や意識、身体化、自己認識、他者との関係、世界観における障害が生じる（vander kollk,B.A、1987）。

エクスナーの包括システムによるロールシャッハテストからは、被虐待者の心理的な特徴がよく理解できる。ここで、虐待による解離と、長期被虐待者の行動パターン、そして、世代間で伝達される虐待体験という、異なる虐待に関する三つの論文を取り上げる。

Armstrongによれば、解離症状がある被虐待者は、内側や外側からの刺激や痛みから逃れるため、徹底して感情から距離を取る。例えば、あらゆる刺激を、単純でパターン化された行動によって処理する。そして、なるべく情緒から引きこもる。加えて、空想に逃避することで感情を処理しようとする。しかし、このような対処の仕方は、思考にも障害をもたらす、注意散漫な状態に被験者を至らしめる。また、性的な被虐待者には、特に性的な反応や内臓、血といった反応が多く見られる。（Armstrong.J.G.、2002）。この論文からは以下のことがわかる。感情を解離している人は、表面的な対人関係しか持たず、深い情緒交流を避ける。時には、感情によって混乱することから自分を守るために、空想への逃避や知性化といった防衛を用いる。また、特に性的な被虐待者は、自己の身体へ重大な関心を持っている。悲観的思考がそこに重なり、自己脆弱感にさいなまれている場合もある。

Ephraimによれば、長期に繰り返し暴力を受け続けた被虐待者はPTSDの診断基準を満たさないことは多いが、その影響は人格の破壊にまで至っていると考えられる。このような被虐待者はロールシャッハによる侵入的な刺激で、解離によって切り離していた体験を想起し、認知的な混乱を生じる。このような混乱が生じないように、心的外傷の想起を避け、視野を狭め常同的なパターンで反応する（Ephraim.E、2002）。この論文から以下のような特徴が理解できる。長期的な被虐待者は、型どおりに人に接することはできるが、人と距離を持ち、深い人付き合いは難しい。その内面は、人格の破壊といえるような混乱が潜伏している。

Berantによれば、ホロコースト・サバイバーは、体験を言語化し物語を子孫に語り伝えている家族もある。しかし、サバイバーが体験を消化できず、言葉ではなく態度や雰囲気や体験を子どもたちに伝えている場合もある。そのようなサバイバーが母親になった時、子供から分離できず支配的に振舞うことがある。その結果、子どもにまで様々な情緒や行動上の問題を引き起こす。まず、このような子どもたちの認知障害は、精神病よりさらに複雑な場合が多い。自我境界が曖昧で、外的刺激と内的刺激の区別が困難となる。このような認知障害は、抑うつ状態を躁的に防衛していることが原因だと考えられる。個性的で独特の行動様式を取る可能性は高いが、現実を検討する能力は精神病に比較し保たれている。また、彼らには攻撃者と犠牲者が共存して内在化している。何事にも用心深く、傷つきやすい。自分の資質を低く見積もりがちである。感情的には、死に関するテーマに通じることを一切抑制し、傷つかないように、人と距離を取っている。このような複雑な感情が現実を歪曲し、感情を刺激するカラーカードには批判的に反応する。将

来への夢や望みもなく、不安や苦しみが心を占めている。自己像に関しては、自分に関心は高いが、不満が多く劣等感や自尊心の低さが見られる。彼らは、他者の評価に敏感で、自分が他人に比べて能力が低く、弱いと感じやすい。よって、家庭を作る、職業を得るなどの一般的な生活を営むことが難しくなることも多い。(Berant,E、2002)。このように、親から子どもへと虐待体験が伝達されることもある。

成人の被虐待体験は、このように様々な障害を引き起こす。成人よりも未分化な子どもには、さらに特徴的な心理状態や身体症状などが表れる。

子どもが慢性的に虐待を受け続けると周囲へ過敏になり過覚醒が生じる。これらを土壌にして周囲からは理解することが困難な思考過程が出来上がってゆく(Herman,J.L.1992)。また、このような子どもには、知覚によるPTSDの体験の膨大な量の記憶の貯蔵や誤認知、前兆形成に加え、否認と精神的麻痺、自己催眠、解離、怒りと受動性が見られる(Terr,L、1991)。これらは、様々な行動や情緒障害を子どもに引き起こす。

子どもの情緒と行動の障害に関する調査によれば、児童養護施設に入所している被虐待児童は、不安の表現、発達の遅れ、引きこもりと無表情、攻撃行動、性的虐待への反応が、虐待を受けていない児童に比べ有意に多い(斉藤、1998)。また、施設に入所している被虐待児童は、遊戯療法において、勝つことへのこだわり、被虐待的アプローチの表現、解離的な行動、服従的で被害妄想的な表現、支配的な行動、道具的な対象化、落ち着きのなさ、他者への不信任といった、関係性や愛着の障害を顕著な形でセラピストに向けることがある(森田、2006)。

被虐待児童の中には、情緒や行動の障害だけではなく、過覚醒によって生活リズムや身体のとまりを失う被虐待者もいる(Herman,J.L、1992)。また、胃腸障害や頭や腰骨などの痛みを訴える者も多く、身体表現性障害に当てはまることは多い(Patonum,P.W、1997)。その痛みさえ麻痺し、感じないように無視する場合もある(Terr,L、1991)。

3. 被虐待児童の心理面接

成人のカウンセリングの中心は、身体感覚を伴った被虐待体験の想起と、その語りによる解離した体験の再統合である(Herman,J.L.1992)。ハーマンは、治療の中で、家族面接、カップルカウンセリング、カタルシス療法、フラッディング・セッション、証言療法、グループセラピー、サイコドラマ、アミタール面接、催眠といった技法を取り上げている。また、再統合や意識の変容を目的とした技法としては、1980年代後半に認知行動主義学者のシャピロ(Shapiro,f.)が考案した「眼球運動による脱感作と再処理法」(Shapiro,F、1995)、ユング派の分析家のミンデル(Mindell,A.)が創始した「プロセスワーク」(Mindell,A、1985)、本来、誰にでも備わっている子どもの性質や力を活性化し、子どもの頃からの心的外傷の回復を目的としたイメージ技法の一つである「インナーチャイルドワーク」(Abrams,J、1990)、ボーウェン(Bowen,M)の「家族システム論」以来、広く使用されている「ジェノグラム」(McGoldrick,M.,et al、1985)など、個人やグループを対象にした様々なカウンセリングが試みられている。しかし、虐待の状況や本人の持つ社会的な資質、個人の自我の強さなどの様々な要因が複雑に関与するためか、薬物療法から心理療法や技法に至るまで様々な見解があり、統一見解は見られない。

被虐待児童には、一般的に遊戯療法が選択されることが多い。遊戯療法は、子どもをリラックスさせ、自分の体験を表現しやすくする(Gill,E、1991)。遊戯療法を大きく分けると、再体験

と開放を何度も経て再統合へ至ることを目指したポスト・トラウマティック・プレイ（西澤、1998）と、象徴的な表現によって体験を間接的に表わすことで、二次的な傷つきを回避する遊戯療法を提唱する（森田、2006）治療者がいる。ポスト・トラウマティック・プレイの第一人者の一人として紹介されるギル（1991）も、性的あるいは身体的な虐待を受けた児童は、援助的な介入さえ侵入的に感じるほど自我境界が弱いという理由から、臨床場面では、非指示的な遊戯療法を選択している。

このように、被虐待児童は成人よりも、言葉と行動が未分化であり、面接や技法に関する結論は単純に出せず、現在模索中である。さらに、被虐待児童のなかでも思春期児童の面接は、遊戯療法も適応ではなく、言葉による面接だけでも不十分である。特に重度の被虐待児童の心理面接は困難となる可能性が高い。このような被虐待児童を身体感覚から理解することには意義があると思われる。

4. 心的外傷と身体と感覚

上記のように、被虐待児童は、過覚醒によって、生活のリズムや身体の纏りさえ失うこともある。彼らは精神症状や心理的な苦痛だけではなく、解離による身体感覚の麻痺や、醜形恐怖、身体的愁訴などが生じる可能性も大きい。また、虐待によって外界への感じ方や意味づけが変わってしまうこともある。虐待を体験するということは、生理的な症状、精神症状、心理的、社会的な障害が複雑に絡み合っている。よって、精神医学的な問題と心理的な問題を分けることは困難である。このように、様々な問題を抱合しているところに被虐待児の心的外傷の特徴がある。よって、各分野のいずれの観点も欠くことが出来ない。そこで、被虐待児童の問題を、より包括的に心理学や心理面接から考察することは、大変重要だろう。

そのために筆者は、被虐待児童の中でも身体的被虐待児童の心理面接における身体感覚に注目したい。身体感覚は発達上で最も原始的な感覚である。身体的被虐待児童の心理的破綻の基底には、その身体感覚の破綻が根ざしているのではないだろうか。さらに、その身体感覚の破綻が、心理的な自我境界の脆弱さや自己同一性の危機、人間関係の困難を引き起こすこともあるだろう。また、身体的被虐待児童のこのような傾向は、他の被虐待児童にも共通の傾向を顕著な形で示しているようにも思われる。そこで、事例を身体感覚から考察するために、ディディエ・アンジュー（Anzieu, D., 1985）の『皮膚—自我』の理論を以下に取り上げる。

フロイトは、心的装置に関して皮膚の隠喩を用いた。フロイトは、1920年の『快楽原則の彼岸』で、外傷神経症を外部から来て刺激保護を突破するほどの強力な興奮であると定義した。アンジューは、心的装置や自我に皮膚の隠喩を用いたフロイトと、安定した連続性を保つ中心である自我に加え、自我の境界感覚は境界が不断に揺らぐ感覚であると自我境界にまで自我理論を発展させたフェダーン（Ferdern, P.）の二人の自我の理論に依拠している。二人の理論に依拠しながらも、彼は、精神分析を補完する形で前エディプス期の母子の接触の界面としての皮膚を重視した。彼によれば、皮膚には常に二重の役割がある。母子間での皮膚への刺激は、実際の刺激からコミュニケーションへと変化する。この時、十分な皮膚の接触を経て、その接触が禁じられた時に、初めて本当の象徴性や自我が生じる。皮膚-自我が、思考する自我へと変化した後も、皮膚-自我は、思考作用の背景として存続し続ける。母子間の皮膚接触が不十分である場合、皮膚感覚の様々な不具合が生じ、自己の倒錯や破綻を引き起こす。彼は、皮膚感覚を、知覚—意識体系を目覚めさ

せ、全体・付随的な存在感覚の基礎を作ると考え、皮膚に9つの働きを与えている。皮膚は、1. 母の手によって支えられることで姿勢を保つことによる自律性の端緒となるもので前口唇期的リビドーの把握衝動の現われであり、2. 身体的なものと心的なものを内部に保つ容器であり、3. 外界からの保護装置であり、4. 外部との境界として個別性を保ち、5. 皮膚の様々な感覚は図として付置される地をなし、共通感覚の基盤となり、6. 乳児の皮膚はリビドーの容器であり、7. 外部刺激による適度な興奮により再充当され、8. 外界からの働きかけの痕跡を記し、9. 皮膚は自己破壊の現象の場となる。彼は、重度の外傷や境界型あるいは、自己愛などの人格障害に対しての面接は、従来の分析以前に母子ユニットで感じる皮膚感覚の再生からやり直すべきだと考えている。その母子ユニットは、分離を予期しているが、一枚の皮膚として体験されるような相互関係である。子どもが、養育者と能動的に関係を持っていることを、皮膚感覚で感じる環境である。彼によれば、この母子ユニットは、分析場面では、実際の身体接触が無くても、相互が身振り手振りで相手の感情に触れられることによって、実現可能である。実際に、音響、温度、嗅覚、味覚、筋肉、苦痛、夢を分析し、これらを用いる事で外皮を再獲得した事例を取り上げている。

この様に、皮膚は、物理的な皮膚にとどまらず、自己の境界として心理的にも重要なものである。そこで、身体的被虐待児童の事例を取り上げ、面接事例を身体感覚から考察することは重要である。

5. 身体的被虐待児童の一事例

事例A（考察に支障のない変更、省略を守秘のために行った。「」はクライアントの言葉、＜＞はThの言葉、『』は語りの中の言葉とする。筆者は、以下、Thと表記する）。

【入所までの経緯】 中学1年男子Aは、父親にバイクで背後から轢かれた。Aの身体は宙に飛び、溝に落ちた。この時に、顔や四肢に重度の裂傷を負った。これを契機に、Aは保護されB施設へ入所した。

【Aの主訴と状態像】 Aの主訴は不眠だった。知能は普通域の上位を保っていたが、生活上では記憶障害が見られた。保育士は、問いかけに返答することもなく、ボンヤリとして反応に乏しいAの養育や対応に困っていた。

当時のAは集団生活するほど精神的に安定していないにもかかわらず、集団生活を余儀なくされていた。集団にうまく適応できず、常に内側や外側からの何かに脅かされていた。Aの体験は、内と外、事実と内的現実を分けることが出来ないほどのダメージを引き起こしていたと思われた。また、Aの行動や表情からは、死の力に圧倒され飲み込まれそうな状態であることが推測できた。さらにAは、体の傷が治癒しているにもかかわらず、身体の形がおかしいなどの醜形恐怖、からだの痛みという身体愁訴と、「身体が宙に浮く」フラッシュバックと思われるイメージを繰り返し訴えた。その上、思春期のAの面接は、プレイセラピーの適応ではなく、会話による面接だけでも成立しにくい。このようなことからAとの面接は困難であることが予想された。

【面接構造】 施設の生活寮に併設されているカウンセリングルームで、1/1W、50分の面接を行った。3年6ヶ月で就職のため施設退所し面接を終了した。

【第一期(X年#1～#19)：身体の痛みと死のイメージの圧倒】

初回面接では、風景構成法を施行した。Aの描いた風景は、田舎の一軒家と田んぼと山並みが

丁寧に、そして緻密に描かれていた。しかし、筆圧は弱く、彩色も薄いことから、Aのエネルギーは低く、感情が希薄だと思われた。初回面接でのAは、困惑した表情をした寄る辺のない印象と、年齢よりも大人びた印象が混在していた。

主語や時間が前後するなどの混乱はあったが、Aは、虐待のエピソードを言葉によって詳細に話すことができた。しかし、その言葉は感情を伴った体験としてではなく、体験の時の光景を言葉で説明しているだけだった。Aは、知的な記憶を解離しているのではなく、感情を解離していた。また、技法による誘発をしなくても、Aは、自分の生活での体験や見聞や夢として、虐待体験の再体験を表象するイメージを自然に繰り返し語った。「動物の子供が親に食い殺される」、「ある人がタクシーごと水没して自殺した」、「貯水池へ飛びこみ身体が宙を浮く体験」が現実生活の中での出来事として語られた。また、不眠があったAは、眠ると、「怪物に追いかけてられ食われそうになる」、「ガクッと落ちる」、「部屋が回る」などの悪夢を見ることを話した。Thは、Aが無力に死のイメージに飲み込まれるように感じ、Aの死のイメージを賦活させる面接の継続に戸惑いを感じていた。またAは、「身体が歪んでいる」、「手が妙な形をしている」、「体が痛い」と頻繁に訴えた。Aは顔や四肢に重度の裂傷を負った。しかし、この時、Aの傷は、ほとんど治癒していた。それにもかかわらず、「人の心も身に包まれている、というフレーズを学校で習ったが、その意味が分からない」と訴えるほど、Aの自己損傷感や身体像の損傷は激しかった。これらの訴えは、解離されたAの怒りや攻撃心といった感情が、醜形恐怖や身体の痛みという身体感覚に表れているのではないかとThは理解した。これらのAの身体感覚による表現を頼りに、Aの内的な状態を理解できるのではなかと考へ、Thは面接の継続を決意した。

Aへの面接の方法は、二者関係や心的外傷への焦点付けという選択肢も考えられた。しかし、虐待体験への性急な焦点付けは、Aが被害的になり、ThがAの妄想的な対象となる危険性や、Aの思考をさらに混乱させる危険性があった。そこで、Thは、Aの「体が痛い」、「歪んでいる」といった身体的な愁訴と醜形恐怖を入念に聞くことに徹した。侵襲的になりすぎることを避け、＜身体の何処が、どんな風に痛むのか＞ということを中心に聞き、＜何故そう思うのか＞という内的な理由を尋ね、介入するような言葉はなるべく控えた。Aは面接中よく眠ったが、徐々にAの眠る様子は変化した。最初の頃は椅子の上にぎゅっと縮まって身体を硬く丸めて眠っていた。徐々に、「ここは、ポカポカして暖かいな、何故か眠くなる」と、机に身体をあずけてまどろむようになった。内と外の区別がつかないほど身体像の深部まで破壊され混乱しているAが、眠ることで混乱から自分を守っているのだとThは考えた。よって、Aが一番ストレートに出している痛みという身体感覚やその変化をThも感じながら、面接時間を共に過すことにした。この時期は、面接やThが、まるでAを取り巻く空気のような存在であったと考えられる。

【第二期（X+1年#20～#31）：生と死の拮抗】

第二期では、第一期の症状や身体の痛みに変化は見られなかった。また、保育士による生活場面でのAの様子や報告でも、変化は無いということだった。しかし、第二期で、Aが面接で語るイメージは、生と死が拮抗し始めていた。例えば、水に飲み込まれることで表された死に対する恐れや不安は強かったが、映画などでは、水になすすべもなく飲み込まれる人だけでなく、そこを生き抜く人の強さに着目した。また、環境に適応しながら生きてゆく野生動物のたくましさに着目し、感心することもあった。このように、Aのイメージは生と死が拮抗するようになった。

また、Aは、自分では理解しがたい虐待体験を表象していたと思われる、霊的な恐怖体験を知性化しようとした。しかし、最終的には「怖いものは怖い」と自分の恐れを受け入れる強さを見ることがあった。Aは、将来の自己像の萎縮や悲観はあったが、わずかに自分の将来の夢について考えることもあった。一方で、二階の窓から飛び降りるなどの行動化もみられた。この時、Aの生と死の葛藤は強く、死への恐怖が生じると同時に、Aの生きることへの恐れや不安も強まったように思われた。まさに、Aにとっては変わり目であった。Aの命の危険性をThが感じることも多かった。この時期のAは、外からは理解しがたい激しい葛藤の中で、わずかな将来への光を見出そうとしていた。この時期のAは、内的な葛藤への対応にかなりのエネルギーを消耗し、生活には障害が生じていた。

一方で、AとThの関係は、身体的な愁訴だけではなく、Aの身体の傷をThに直接見せたり、施設でいじめの対象になっていることや、体力が無くZ登山に失敗して落胆したことを訴えるなど、自分の弱さや失敗や不安を話せる程度に安定してきた。

この時期の面接の中でThは、Aの事実と心理的に分かちがたい痛みの中に、わずかに感じることのできる内的な変化や希望を汲み取り、この時期をAと耐えるほかなかった。

[第三期（X+1年 #32～#55）：故郷の記憶を器にして身体感覚を統合する]

施設でAが長期的に生活することが第三期の最初に決定した。それを機に、Aは、母方の故郷で過ごした思い出を語った。その語りは、生き生きとした身体感覚を伴っていた。Thは、Aが語る母方の故郷の情景を聞いた時に、初回面接の風景構成法を想起した。

Aは、面接で、「一緒に赤い木の実を見てほしい」と、Thに初めて自分の要求を訴えた。そして、同じ物を二人で見ながら、Aは故郷での体験を語った。特にThにとって印象的だったAの語りは、山の中の森林探索や、田舎家の屋根裏探検、真っ暗な夜の満点の星、小川の冷たさを伴った楽しい思い出だった。故郷での体験が、「冷たくて気持ちが良い」「暖かい」などの細やかな身体感覚を伴って生き生きと語られた。または、故郷での祖父の葬儀の際の、「ひんやりと湿った靴下が気持ち悪い」といった身体感覚や、葬儀のためにフェリーで故郷まで海を渡った時の「底知れない海の暗さが怖かった」といった不愉快な身体感覚も語られた。第一期、第二期では、「痛み」以外の身体感覚を伴った訴えは少なく表情は悲哀だけだった。しかし、第三期のAは、喜怒哀楽や不安などの心理を身体感覚によって表した。それを語る時のAの表情は豊かに変化し、Aの感覚が戻ったのではないかと思われた。Aが、懐かしい故郷での体験を、身体感覚を伴った記憶として想起し語ることは、破壊されたAの深部の身体感覚を統合してゆくための器となったようだった。この語りは、Aの生活環境が整い、安定したことに重なり合って生じたことは言うまでもない。

また、この時期のAは、同じものを見てほしい、または、同じ音楽と一緒に聴いて欲しいとThに要求することが度々あった。この時のAとThの関係は、母子が共通のものを見ながら楽しみ体験するような関係にあったと言えるだろう。

[第四期（X+2年 #56～#89）：感情の発露と現実への直面]

Aは受験を乗り越えてX校に入学した。Aは登校して、勉強する日々充実感を持っていた。また、学校では入所以前の友達との関係が回復した。保育士からは、今までとは違い、Aに生活を楽しむ余裕ができてきたと報告があった。Aには、依然として解離と思われる症状や行動も多

かった。しかし、Aの行動化は以前の危険なものから、万引きや喫煙など、大人にも理解しやすいアピールへと変化した。面接では、眠ることも多かったが、楽しそうに学校行事や施設の行事について話をし、甘えてダダをこねるような様子も見られた。保育士やThに叱られると、怒るより、むしろうれしそうに笑った。施設の他児との交流も、兄弟のようにじゃれあったり、けんかしたり、食べ物を取り合うほど活発になった。そのような過程の中#73では、「嵐の中、Aを乗せて浸水した道路を車で走り回る」という、Aにはとうてい理解できない父親の行為への怒りを表出するにいった。その時のAの宙を睨みつける表情に、Thは圧倒されそうだった。一方で、その直後に父親を心配するようなイメージが語られた。Aは、今まで身体の痛みや歪みといった形で自分に向けていた怒りや憎しみを、感情として対象へと表出するようになった。

この時期の終盤に、Aは、今まで回避していた現実と直面することが度々あった。例えば、父親に似た人物を見かけて自ら追いかけた。また、自宅の近くに行ってみることもあった。Aは、家の近隣の風景が想像していたよりも小さく見えて、近くを流れる川の水量も減っていたと、Thに話した。このことによってAは、虐待を体験した現場が、以前ほど自分を圧倒する情景ではなくなったことを確認した。つまり、今までAを混乱させていた情動は、この時Aを圧倒するほどではなくなっていたようだった。

[第五期(X+3年 #90～)：夢による死の体験]

#90で、Aは、「半眠半覚の時に、落ちてゆく夢をよく見る。落ちてゆく自分を見ている自分も落ちている夢だ。しかし、周りが真っ暗なので本当は落ちているのかが分からない」という夢を報告した。これは、Aの死ぬことのできない底なしの人生を表しているようにThは思った。

そのすぐ後の#91で、次のような夢を見たAは話した。「自分が死んだような夢を見た。枯葉の上に横たわっていた。それが自分で(橋の上から)見えた。(死体の傍には)川があった。(川と橋が交差した川原に死体を図示した)。すごく焦った。『まだいっぱいしたいことがあったのに死んだのか!』と思った。白く、うつぶせになった死体があった。その横にもうひとつ死体があった。その死体は何故かぐちゃぐちゃだった。(白い死体は)銀色の袋に入っていて、外からさわると鼻が丸く(袋が突起して)出ていた。とても焦って、『死んでいる!』と叫んだ。言葉では表現できない感じだった。そこから先の夢は、覚えていない」とAの語りは途切れた。Thは、ここで夢の語りが途切れてしまうと、Aに混乱が生じ、行動化する危険性を感じた。だから、Thは、Aに、<そこからは?>と、強くその先をAが語るように促した。「ああ、それから施設へ帰ってきた。でも誰も気づかない。だから、自分は叫んだ。誰か一人だけ気付いた。誰が気付いたのだろう。本当に死んだと思った」。その夢を話した後、Aは、「その夢が現実にかかるのではないか」という恐怖による混乱を起こした。Thは、Aに<これは夢であって現実ではない。大丈夫だ>と保障した。この時に、Thは、Aの混乱へ介入し、Aを三者関係へと押し出す役割を果たしたように思われた。

この夢は、Aが面接中に見た唯一の象徴的な夢だった。この夢を自我の側面から解釈すると、次のように考えられると思われた。Aは、自分の死体を手で触り確かめることで、自分の生の欲求を実感した。その後、Thが促した言葉によって、Aは、橋を渡り施設へ帰った。今までは、無視されてもアピールできなかったAが、皆に向かって大声でアピールするという受動から能動への変化が生じたと考えられた。また、生と死の葛藤という観点から解釈すれば、Aの底がなく

死ねなかった人生の底つきの体験だとも理解できた。また、2つの死体は、傷ついたAと、治癒したAが分離したとも理解できた。このように様々な側面から考えることができる夢だった。

この夢の数週間後に、「（以前登頂に失敗した）Z山に一番に登れた」と、Aのうれしそうな報告を受けた。夢での体験は、Z登山に成功するという生活上の体験を経て、Aの中では自信へと変化したようだった。

その後の面接で、Aは、復活のイメージを少し話すことがあった。しかしAとThは、面接の大部分を雑談で過ごした。この時の面接は、Aが生活での出来事を報告しに顔を出す家の役割を果たしていたのだろうか、Thは思った。

Aは、ややボンヤリとしてはいたが、身体の痛みは消失し、醜形恐怖も訴えなくなった。Aは施設での生活を楽しみ、それが終わるのを惜しみながら就職していった。施設の保育士は、「Aが退所時に感謝を述べてくれた」と驚いた。Aは人に感謝を示すことが出来るほど成長していた。

5. 考察

Aは、最初に述べた、単純型と複雑型の両方を含めた大人のPTSDの基準も、子どものPTSDの基準も満たしていた。Aの症状は、重度であり、かつ、複雑だと考えられた。

このようなAが身体感覚を再獲得する過程を考察するためには、アンジューの述べる皮膚感覚という原始的な幻想と、皮膚における二重性に関する概念が有効な視座を与えてくれる。虐待体験による皮膚の裂傷の感覚がAを支配し、Aにとっては事実と心理的なものが分離不可能な状態だった。そして、Thは、Aが感じている痛みや醜形といったことが表している身体感覚の破綻から、Aの心理的な状態を推察する他にアプローチする方法を思いつかなかった。初期は、心理的なものを包み込むAの皮膚は破れ、自己を包む器として機能していなかったと考えられる。

アンジューは、乳幼児は自己を液体かガスのように感じており、養育者が刺激によって皮膚という境界を強化し、内容を包みこむ皮膚としての機能を賦活させなくてはならないと指摘している。彼によれば、このような機能が不全である場合、クライアントは自分の皮膚が破れているなどの不具合に悩み続ける。それが心理的に様々な障害を引き起こすという（Anzieu,D.1985）。

Aとの面接は、まず、AとThが二人で黙っていてもリラックスでき、Aが暖かさを感じるようになったことから少しずつ進展したと考えられる。アンジューは、この面接室での二者関係が、「暖かさの外皮」というクライアントの原初的な幻想をかきたてると述べている。彼によれば、侵入しないが孤独を支える他者がいることによって、身体的な自我が拡大し、充足を感じる。また、そのことでクライアントの自己愛へのエネルギーが備給され、自我境界が強くなる（Anzieu,D.1985）。この概念から事例を考察すると、まず面接室という場自体が、Aの外皮となったと考えられる。その後も、アンジューが言う乳幼児のような皮膚と自己の状態に陥っている、形にならない混乱したAの内面を支える外皮の役割を果たしたと考えられる。その中で、ThがAの外皮の一部であり続けるためには、ThがAの内面を察し、Aへの接し方を決めなくてはならなかった。その時の手がかりとして、Aが訴える身体感覚があった。この時、Aの身体の痛みや歪みなどの身体感覚は、客観的に理解できないAの内面の状態を代わりに表現する記号として働いた。

アンジューは、面接の二者関係において経験される皮膚感覚を重視している。この面接でも、二者関係の変化に伴い、Aの皮膚感覚の働きは変化した。自閉的な時期から同じものを二人で共有できる関係性への移行と、故郷の想起を器にして皮膚感覚の働きをAが再獲得した時期は、同

時だった。これは、アンジューが論じる、面接における相互の皮膚感覚を経験するためのユニットが展開されたといえる。この事例においても、面接という二者関係による皮膚感覚が内面を守る障壁として象徴的に取り入れられた時に、自我境界が働き、外的現実と内面を分離するようにAの心理的な皮膚が働き出した。そして、それが自己の再形成へとつながった。#91の夢を皮膚感覚の視点から考察すると、銀色の布に包まれた死体は、Aの身体を取り巻く面接という器が、Aのなかみを包む一種の皮膚として象徴的に内面化されたと考えられる。このことによってAの自我境界がはっきりとし、外と内の区別が明確になったと推察できる。その後、Aは三者関係の世界へと参入していった。#91の夢は、身体感覚の表象から象徴への変化、または、受動から能動への変化を明確に表している。アンジューは、皮膚感覚の表象から象徴への移行には、接触の禁止を経て完成されると考えている。Aは、象徴的に死を経験することで、実際の死を禁じられた。そして更に、Aが死に留まることをThが禁止したことによって、Aは象徴的な世界へと参入したと思われる。この時に、面接室が代理していた外皮が、Aに内在化されたとも考えられる。さらに言えば、身体感覚が、皮膚として内在化され、統合され、象徴的なAの死の体験として現れた時に、心的外傷を乗り越え、外傷の固着からAが解放されるための力となった。よって、面接全体を通じた二者関係があったからこそ、Aの身体感覚は、混乱した思考や融合した欲動から抜け出すための糸口となっていたといえる。

この事例でも確かにAの昔の体験の想起には、AとThの二者関係が大きく関与している。しかし、上記の変化を経る途中のAの身体感覚の想起は、面接室やThとAとの二者関係の中だけで自己の境界の広がりや留まれば、生じなかっただろう。Aは、故郷での家族との体験の記憶まで自己の境界を広げ、それを器として、身体感覚を再構成した。また、Aは、快の感覚だけではなく不快の感覚も想起した。だからこそ、Aの感覚は、快と不快が複雑に絡み合う心理的な綾を表現したと考えられる。Aの原初的な身体感覚と、その感覚の再構成には、二者関係を超越する故郷という大きな器を必要とした事は留意すべき事柄である。この事例では、このような器の上で再獲得された身体感覚が、Aの感情の統合の基礎となり、象徴的な世界へとAが移行する準備が出来たのだと思われた。このような身体的自我の拡張や、境界の広がりや、深部の皮膚感覚まで破綻したクライアントにとっては、大変重要な面接の転機となりえると考ええる。

6. おわりに

まず、このように自己の再構成を皮膚にまで広げて考察するには留意すべき点も多いだろう。また、被虐待児童の完全な治癒というものは、ハーマンも指摘するようにありえない。よって、被虐待児童はライフ・イベントの度に何らかの困難にぶつかる可能性は高い。しかし、このような身体感覚の変化やその働きから面接を考察することは、重度の身体的な虐待だけではなく、他の被虐待児の自我境界の問題を考えるために意味があると筆者は思う。

文献

Anziu,D.: Le Moi-peau, BORADAS,Paris.1985.: 福田素子訳,皮膚—自我,言叢社, 1993.
Armstrong,J.G.: Deciphering The Broken Narrative of Trauma: Signs of Traumatic Dissociation on the Rorschach.: Rorschiana.Yearbook of the International Rorschach Society. Hogrefe & Huber and Publishers.2002.

- Aries P. L'ENFANT ET VIE FAMILIALE SOUS L'ANCIEN REGIME.1960：杉山光信・杉山恵美子訳,<子供>の誕生,みすず書房,1980.
- Berant,E.：Transgenerational Transmission of Trauma in Children of Holocaust Survivors：A Case Study Yearbook of the International Rorschach Society, Hogrefe & Huber and Publishers,2002.
- Cappachione,L.：Recovery of Your Inner Child.：Simon and Schuster, New York,1991
- Ehram,D.：Rorschach：Trauma Assessment of Torture and State Violence. Yearbook of the International Rorschach Society,Hogrefe & Huber and Publishers,2002,pp.58~73
- Freid,S.：Jenseits der Lustprinzips,1920:小此木啓吾訳,快楽原則の彼岸,人文書院,1970.
- Herman,J.L.：TRAUMA AND RECOVERY.：HarperCollins Publishers,Inc., New York 1992.：中井久夫訳,心的外傷と回復,みすず書房, 1996.
- 本田和子:子ども100年のエポック,フレーベル館,2000.
- 川崎二三彦：児童虐待—現場からの提言,岩波書店,2006.
- Mc Goldric,M., Gerson,R.：Genograms In Family Assesment.：W.W.Norton, New York. 1985.
- 森田喜治：児童養護施設と被虐待児,創元社,2006.
- 西澤哲：子どもの虐待—子供と家族への治療的アプローチ,誠真書房,1994.
- 西澤哲：トラウマを受けた児童への治療的接近-ポストトラウマティック・プレイセラピーを中心に-：斉藤学編,児童虐待[臨床編],金剛出版,1998.
- Patonam,E.W.：DISSOCIATION IN CHILDREN AND ADOLESCENTS: The Gilford Press,1997:中井久夫訳.解離-若年期における病理と治療-, みすず書房,2001.
- Rousseau,J.J.：ÉMILE ou DE L'ÉDUCATION.1762：今野一雄訳,エミール上・中・下,岩波文庫,1962.
- 斉藤学：児童虐待というトラウマ,斉藤学編,児童虐待[臨床編],金剛出版,1998.
- 斉藤学：被虐待児の情緒と行動, 斉藤学編,児童虐待[臨床編],金剛出版,1998.
- Sapiro,F.：Eye Movement Desensitization and Reprocessing, Guilford, New York , 1995
- van der kolk,B.A. & Fisler, R.E.: Childhood abuse and neglect and loss of self-regulation. Bulletin of the Menningen Clinic, 58, No.2,1994.

参考文献

白石大介 小笠原慶彰 編：児童福祉論, 相川書房, 1991.

(臨床教育実践指導学講座 博士後期課程 3 回生)

(受稿2008年9月8日、改稿2008年12月17日、受理2008年12月18日)

Self-reconstruction as Viewed from the Physical Sense of Abused Children

KATAYAMA Tomoko

Symptoms of physically abused children are shown over a wide area, both physical and mental, including psychological and social disorders. Currently, research and case studies are being carried out on abused children. In this article, the writer focuses attention on the actions and changes in the physical sense of abused children in an interview, and examines one case. The breakdown of the child in this case assumed to be caused by primitive physical sense, and was assumed to cause other psychological disorders. The writer examined such physical sense based on the theory of illusion called primitive physical sense by Didier Anzieu. In this case, the skin sense of the client was internalized and recovered from breakdown based on change in the relationship of two people. Furthermore, with the regaining of physical sense, personal boundaries of the client expanded beyond the two-people relationship and interview room, and to past experiences in his/her hometown. This became a vessel, sense was reintegrated, feelings could be expressed, and self-reconstruction occurred. In this way, regaining physical sense was considered to be the turning point of this interview and is assumed to be effective when considering interviews of other abused children, as well.